

ヘルマン・ホイヴェルス 『細川ガラシア夫人』（その一）

三 木 サニヤ

“Hosokawa Gracia” written by
Hermann Heuvers (Part 1)

MIKI Sania

Abstract

Related to the extension held last year, which was “Visiting the Remains of Hosokawa Gracia” I am going to introduce a famous drama “Hosokawa Gracia” by Hermann Heuvers, a priest of the Society of Jesus.

Hosokawa Gracia Tama was a wife of Tadaoki, whose father was Hosokawa Tadatoshi, the lord of Kumamoto. Her mausoleum is at the garden of Taishoji Temple in Kumamoto. This woman was born as daughter of Akechi Mitsuhide, was married into Hosokawa family and lived happily until she fell into the nadir of adversity owing to the rebellion of her father, Mitsuhide. However, she entered Christianity, converted the surrounding people to Christians and led them to ever-lasting happiness. However, she was taken as Mitunari's hostage. Following her husband, Tadaoki's intention, she finished her life

tragically.

In this thesis, I would like to introduce the outline of Hosokawa Gracia Tama's life after describing about the writer, Hermann Heuvers, a priest of the Society of Jesus.

Key words : 1. Paragon for Women 2. Christians in feudal age

3. Imprisonment in Mitono

昨年度の公開講座で行った「細川ガラシア夫人の遺跡めぐり」に關連して、今年度の紀要の論文で、イエズス会神父ヘルマン・ホイヴェルスの有名な戯曲『ガラシア・細川夫人』の紹介を行うこととした。

細川ガラシア玉夫人は、熊本の泰勝寺庭園に廟があり、熊本の領主であった細川忠利の父忠興の夫人である。この女性は、かの明智光秀の娘として生まれ、細川家に嫁いで幸せに暮らしていたが、父光秀の事件により反逆者の娘として不幸のどん底に落ちた。しかし、キリシタンの信仰に入り、周囲の人々を回心させ、永遠の幸せに導いた。そして、夫忠興の意向に従い、石田三成によつて壮烈な最期を遂げた。今回は、作者のホイヴェルス神父について述べた後、細川ガラシア玉夫人の生涯のアウトラインを紹介したいと思う。

キーワード 1 女性の鑑 2 キリシタン 3 味土野幽閑

一 はじめに

昨年度（平成二十一年）のビジネスキャリア学科による現代教養講座で、「戦国の花と散った細川ガラシア夫人」という標題のもと、細川ガラシア玉夫人の生涯と、熊本及び大阪玉造にあるガラシア遺跡の紹介を行った¹⁾。

ガラシアの劇的な生涯と、その真摯な信仰は、日本に於いてのみならず、外国（ウィーン等）に於いても広く知られ、オペラになって上

演されたこともあるという。^②

私は、かつて大学の卒業論文で、劇作家田中澄江を取り上げ、その代表作『がらしあ・細川夫人』^③を論じたことがあり、又、私のシスターとしての最初の赴任地が熊本であったため、泰勝寺庭園にあるガラシアの遺跡（四つの廟）を度々訪れた思い出があった関係上、細川ガラシアの優れた信仰と人柄に深い関心を抱いてきた。

そこで、今回は、イエズス会の神父であるヘルマン・ホイヴェルス師の作品『細川ガラシア夫人』^④を鑑賞し、ガラシアの回心のドラマと、壮烈な最期を味わってみたいと考えた。

紙数と時間の関係上、今回は、作者のヘルマン・ホイヴェルス師について調べるとともに、細川ガラシア夫人の生涯のアウトラインを辿ってみたいと思う。

二 ヘルマン・ホイヴェルス師について

戯曲『細川ガラシア夫人』の著者ヘルマン・ホイヴェルス神父は、一八九〇年（明治二十三年）八月三十一日、ドイツのウエストファーレン州ドライエルワルデ村に生まれた。十九歳の時、イエズス会に入会し、オランダのファンケンブルク大学（哲学課程）で学び、卒業後、インドのボンベイ市にあるセントメリーカレッジで教鞭を取った後、一九二〇年（大正九年）司祭に叙階された。そして、日本宣教を志し渡日。一九二三年（大正十二年）八月二十五日、横浜港到着、上智大学に赴任した。

一九三四年（昭和九年）頃より、細川ガラシア夫人の劇作を考え始めるが、一九三七年（昭和十二年）上智大学第二代学長に就任し、一九四一年まで学長職を務めた。その間、一九四〇年（昭和十五年）に歌劇「細川ガラシア夫人」が、東京日比谷公会堂及び大阪朝日会館で上演された。

一九四五年（昭和二十年）、東京イグナチオ教会主任司祭に就任（上智大学教授兼任）し、教職にも就きながら、創作活動が続ける。

一九六五年（昭和四十年）、歌舞伎「細川ガラシア夫人」が、中村歌右衛門主演で東京歌舞伎座に於いて公演される。

一九六六年（昭和四十一年）イグナチオ教会主任司祭、上智大学教授を退任（同名名誉司祭・名誉教授となる）。一九六七年（昭和四十二年）、四十四年ぶりにドイツに帰国、ウエストファーレン州ドライエルワルデ村を訪れた（七十七歳）。

一九七五年（昭和五十年）、戯曲「神津島のジュリア」上演。

一九七七年（昭和五十二年）六月九日、急性心不全のため八十六歳の生涯を終えた。

以上、ホイヴェルス師の略歴を紹介したが、その人柄については、同僚のイエズス会司祭ブルーノ・ビッター神父の書いた「神父の人生涯」（『ホイヴェルス神父―信仰と思想』^⑤）から推察したい。

ホイヴェルス神父は上智大学では高い役職に就いた。ただ教授であっただけではなく、学監、学生部長、副学長を歴任し、一九三七年七月三十一日には学長となった。（中略）

ホイヴェルス神父はその高い地位にも拘らず、非常に謙遜で心の真直ぐな人であった。私は一九三八年のある朝、校内で箒を片手に持ち、頭に手ぬぐいを被って講堂を掃除している彼と出会った事を覚えている。彼はその日の午後、その講堂で講義することになっていた。

彼はただ教授や学長であっただけでなく、常に一人の宣教師だった。だから彼は上智でも、また他の大学や学校でも信仰について教えた。かれの宣教活動はその著作活動によって大きくふくれあがった。二十編にのぼる戯曲作品は、彼が創作をよくしたことを明らかに

に示している。彼が学生達や教授達から好かれたのは、こうしたことすべてのためであった。戯曲「細川ガラシア夫人」は彼の作品中最も優れたものである。これは一九三六年に東京で、同じ年の暮にベルリンで上演された。これに深く感動したサレジオ会士のチマツチ神父は、一九四〇年一月に同じ名前の楽劇にこれを仕立てて、日比谷公会堂で上演に持ちこんだ。これはまた、映像フィルムによって海外にまで紹介された。そして一九六五年、有名な歌舞伎座で上演されたことで、有終の美を飾ったのである。(後略)

ホイヴェルス師と細川ガラシアとの出会いについては、「神父に聞く」というNHKの対談の中で、次のように語られている。

ホイヴェルス神父が日本に来て間もない頃、玉島の教会の裏山に登り、そこにある石の仏像の前でいろいろ瞑想にふけた。そして、「一体この石の仏像によって象徴されている静かなコスモスを黙って受け取るべきなのか、それともこの静寂をキリスト教によって打ち破るべきか」を考えこまれ、すぐに答えは出なかったが、その後細川ガラシア夫人の生涯を知ることによってこの問題に対する一つの鍵が得られたということである。^⑧

その石の仏像がガラシア夫人とどう結びつくのかは簡単には説明しにくい問題であるが、いわば「人生の謎」を探究させるきっかけとなるものであったといえるのではなからうか。

さて、「人生の問題」に直面した夫人は、夫細川忠興の友人である高山右近^⑨によって、間接的に信仰のメッセージを受け取り、神の存在を「直観的に耳で聞き、心で認めることが出来」たのである。ホイヴェルス神父は、その対談でガラシア夫人が「この日本のキリスト教の一つの信者のモデルになる」否、日本のみならず、ギリシアのアンティゴネ、イタリアのベネトリッチェ、フランスのジャンヌダルクらと同じく「世界のモデル」としての価値を持っていると評価している。そ

れほど普遍的な信仰のあり方をこの夫人に見出したのである。偉大な宣教師としてのホイヴェルス師を示す数字がこの文章の最後に示されている。

ホイヴェルス師の八十五歳の誕生日(一九七五年八月三十一日)に部屋を訪ねた折に聞いたところ、五十三年間の日本の宣教活動の間に彼から洗礼を受けた信者の数はおよそ三〇〇〇人であったという。これは決して誇張された数ではなく、本当はもっと多いのではないかと推定されるそうである。

まさにホイヴェルス師は、その生涯の大半を日本宣教のために捧げたといえる。というのは、初めて日本宣教に訪れた一九二三年(大正十二年)後、故郷ドイツに帰国したのは、四十四年ぶりの一九六七年だったそうである。そして、この三年後、再びドイツ旅行を行ったが、それが最後の故郷訪問となった。

このホイヴェルス師をはじめとして、日本宣教に訪れた多くの宣教師も同様であり、彼等は、日本に骨を埋める覚悟で、インカルチュレーション^⑩の実現を目指すのである。

ホイヴェルス師は、その著『細川ガラシア夫人』新版序において、「どうして細川ガラシア劇を書くようになったか」そのモチーフを次のように述べている。

神父は、細川ガラシアの名が、まだ世界的でないのを残念に思い、「ほんとうのガラシアの姿」を全体的に示さねばならない、と思い立ったのが動機であった。そして、この夫人について研究をはじめた結果、「細川ガラシアこそは、たしかに世界文学史上で誇るべき、すぐれた日本女性の一人であること」がわかったという。ガラシアは、

古来日本婦人がそなえている美德の完全な鑑であり、彼女の徳は私たちを知らず知らずのうちに惹きつける力を持っています。彼女

は天下に噂の高い優れた美人でありましたが、しかしそれに劣らない気だての優しさを持つていました。それは弱い優しさではなく、実に修養の力によって強い性質から鍛え上げられた優しさでありました。また彼女が備えていた武士道的美徳、すなわち犠牲の精神、勇氣、真剣などは、まことに立派なものであります。しかしこれらにも増して、ガラシアにはもう一つのすぐれた特長があるのです。それは彼女の思想・知識に対する熱情であります。彼女はものを学ぶためにラテン語やポルトガル語も勉強しました。それからまた信仰によって清い心、深い心、他人に対する優しい心を養い、その屋敷近くの貧民児童および病人の救済事業等をも営んでいました。彼女の中には、古いものと新しいものが、美しく調和し結びあつていたのです。

このような点から見ても、彼女は実に全世界の女性の鑑であると確信しております。

また、神父が後年語った次のような言葉も残されている。

「日本歴史の中で、ガラシア夫人こそは、摂理のいともきびしい導きのもとこの静寂なるコスモスの調和を打ち破つて、聖霊の火により、神の聖心の調和にまでもたどりついた人だと思ふのであります。」¹²⁾

ガラシアの見事な生きざまは、キリシタン時代の宣教師たちにも絶賛され、「天性の国色、容貌の美麗比倫なく、精神活発、穎敏、果敢、心情高尚にして才智卓越せり」と書き記されている。

ここで、ホイヴェルス師作『細川ガラシア夫人』の劇場上演についてまとめると、初演は一九三六年（昭和十一年）東京とベルリンで、楽劇として上演された。又、歌舞伎としての上演は、主演が歌右衛門丈で、東京歌舞伎座に於いて一九六五年（昭和四十年）十一月に行われた。

又、オペラ「細川ガラシア」（全三幕）は、作曲ヴィンチェンツォ・チマッティ師により二〇〇四年（平成十六年）十月八・九日東京オペラシティーコンサートホールで上演された。これは、チマッティ神父生誕一二五年記念の上演である。チマッティ師作曲のオペラの初演は一九四〇年一月、東京日比谷公会堂で行われたが、この「細川ガラシア」こそ、世界初の日本語オペラであつたといわれる。

因みに、世界初の細川ガラシアのオペラは、J・B・アドルフア作、ヨハン・ベルンハルト・シユタウト作品「オペラ 気丈な貴婦人」で、発表は、一六九八年、ウィーンで行われたといわれる。¹³⁾

三 細川ガラシア玉の生涯

細川ガラシア玉は、永禄六年（一五六三年）七月、美濃の国坂本城で、明智光秀の三女として出生した。家譜によると、光秀は、美濃源氏の末裔といわれる土岐一族の出で、土岐氏は代々長山城主としての地方を治めてきた。

奥田利矩著『濃陽諸士伝』（寛永十五年成立）には、「明智十兵衛殿は土岐の土族にて、可児郡明智の庄に住居あるに依つて在名なり」と記されている。又、斉藤道三の正室小見の方は光秀の叔母にあたり、織田信長の正室帰蝶（濃姫）と光秀は従兄妹になるという。この濃姫（道三の娘）の実名は不明であり、『美濃国諸旧記』には「帰蝶の方、鷲山殿といった」とある。

玉の母（光秀の妻）は、『綿考輯録』によると、妻木勘解由左衛門範熙の娘熙子とある。他に、志州鳥羽城主服部出羽守保益の娘であるともいわれる。¹⁴⁾

光秀と熙子の結婚については、有名な話が残されている。服部出羽守の娘伏屋は、祝言前に疱瘡にかかり、容貌がひどく損なわれた。そこで父が一計を案じ、妹娘を嫁がせたところ、妻となる娘が姉の身替

りであることを知った光秀は妹を返し、痘瘡をわずらった姉娘をめとったという話である。¹⁸⁾

他の一つは「しの髪剪り」の逸話である。光秀が浪人時代、客をもてなす金の都合がつかずに困っていた時、しの(妻の名)が夫に内緒で自分の黒髪を切り落とし、金に換えて夫の面目を保った、という話である。¹⁹⁾

いずれにせよ、玉の父明智光秀、母しの、共に義理堅く、情けの厚い人物であることが推察される。

このような家族に恵まれ、父光秀の居城、琵琶湖畔の坂本城で育った玉は、十五歳の時、細川忠興の許に嫁ぐこととなった。

父光秀と夫の父細川藤孝は、かつて足利將軍に仕えた盟友で、当時ともに信長に従って天下統一に尽力していた。そして、信長の仲立ちによって玉は忠興の正室を迎えられたのである。

玉と忠興の婚姻については、『明智軍記』に次のように記されている。²⁰⁾

天正七年正月九日、安土御殿周武の間といふ小書院へ、信長公日向守光秀、長岡兵部藤孝を召し寄せられ、仰出られけるは、日向守三番目の息女十六歳になり候を藤孝の長男与一郎に嫁し、お互いに入魂致すべし、某甥七兵衛信澄、今ほどは器量人にすぐれ志も温和なる者、然るべき城主となし然ば汝が四番目の娘十四になるを信澄にめあわせ、向後よろず光秀指南においては祝着たるべし。

又、『綿考輯録』に記された婚儀の様子は下記のようなものであった。²¹⁾

光秀甚だこれを悦び、藤孝君、忠興君も家門の面目を御喜悅なめならず、同月青龍寺にて御婚礼あり、十六歳にて御夫婦同年なり、

御前様御名お玉様、のちに伽羅奢さまといふ、御母は妻木勘解由左衛門範瀨の女なり、明智左馬介御輿につき来たり、松井康之これをうけ取る、この時、祝言の御座敷は八畳敷と次の間六畳敷ばかりなり。

明智光秀、細川藤孝の両家ともに織田信長の「天下布武」の一翼を担い、嫡子忠興はすでに戦陣で功を遂げ、玉は絶世の美女と噂される才色兼備の女性であった。又、細川藤孝は「古今伝授」で世に聞こえた文武両道の武將、息子の忠興は、千利休の七哲の一人とされる器量の優れた武士であった。かのキリシタン大名高山右近もまた、利休七哲の一人であり、忠興との友好関係が、後のガラシア回心の間接的契機となったのである。

二人は、細川家の居城勝龍寺城で幸せに暮らし、天正七年には長女長が出生、翌天正八年には長男忠隆が生まれた。この年、(一五八〇年)八月、細川家は、丹後へ移封となり、宮津城へ移ったが、その二年後の天正十年六月、玉の人生を変える大きな出来事が起こった。

六月二日、父明智光秀が京都の本能寺に織田信長を襲い、自刃させ、続いて嫡子信忠を二条城に攻め、自害へと追い込んだのである。

その後、光秀は、山崎の合戦で豊臣秀吉に敗れ、阪本への敗走中、小栗栖で土民に襲われて自決した。細川藤孝・忠興父子は光秀の呼び掛けに対して、信長の弔いを名目に剃髪して与せず、光秀の百日天下はあつてなく終わった。

反逆者の娘として玉は、その後、細川家の計らいで、丹後の味土野の山中で、二か年の幽閉生活を送ることとなった。

八身を隠す里は吉野の奥ながら 花なき峰に呼ぶ子鳥なく・・・人里離れた孤独な幽閉生活の間、ガラシアは何を思い、何を考えて暮らしたのであろうか。しかも、この間の天正十一年(一五八三年)に、玉は味土野で次男与五郎(後の興秋)を出産している。又、細川家中

には主家の安泰を願って、忠興には内密で玉に自害をすすめる家臣もあつたが、玉は拒絶し続けた。

「いま、ここで自害すれば、父（光秀）に対する孝道には適うものの、夫忠興の命を待たずに事を成すこととなり、妻たるの道を違えることとなりましょう」²³⁾。

このような玉を慰め、力づけ、後に玉の回心の原動力となつたのは、侍女の小侍従清原マリアであつた。小侍従は、おいとの方と呼ばれ、細川家にとつて親戚筋の、大外記清原頼賢の娘で、父の影響を受け、幼少からキリスト教を信奉し、後に自ら受洗することとなる²⁴⁾。そして、セスベデス神父の許可を得て、玉に洗礼を授けた篤信の女性である。

もし、玉が平穩無事な結婚生活を送っていたとしたら、後のガラシア玉は存在しなかつたであろうし、又、あのような潔い最期を遂げることもなかつたであろう。玉の、キリスト教信者になるきっかけは、父明智光秀の反逆と明智家の滅亡、そして、二か年にわたる味土野での隠棲であり、さらに小侍従との交わり、及びキリシタン大名高山右近からの間接的影響であつたといえるのである。

天正十二年三月、秀吉のとりなしで、大阪玉造の新しい細川邸に帰館した玉は、自分の隠棲中に夫忠興が数名の側室を置いていたこと、しかもその中の一人は忠興の子供まで生んでいたことを知り、愕然とする。しかし、現実生活における不条理は、この世を超えた靈魂の世界での真の幸せ——永遠の生命——への憧れを玉の心にひたすら希求させただけに違いない。

天正十五年（一五八七年）ご復活祭の折、忠興の出陣中の不在をチャンスに小侍従とともに内密で教会を訪れた玉は、バテレン・セスベデス、イルマン・高井コスメ等と出会い、この日本人イルマン（修道士）から詳しく教義を学び、宗教上の疑問を問いただすことが出来たのである。

それ以後は、外出が容易でないため、侍女を教会へ遣わして教義を

学びつづけ、信仰を深め、遂に侍女清原マリアの手で受洗、「ガラシア」（恩寵）の洗礼名を授かつた。

その後の玉は自家の侍女や、家臣を次々と回心へ導き、又、息子、娘、義弟、義母たちをも信者とし、屋敷内には、忠興の配慮によって祈禱室まで設けられ、熱心な信仰生活を送っていた。が、天正十五年（一五八七年）六月、秀吉による禁教令が発せられ、慶長元年（一五九六年）には、長崎で二十六聖人の殉教事件が起こるなど、迫害が次第に強くなつていった。

禁教令と迫害は、忠興らの心をゆるがせたが、ガラシアはこれに屈せず信仰を守り続けた。

そして、慶長五年（一六〇〇年）七月十七日、忠興が家康の上杉討伐に従つて出陣している間に、ガラシアはついに大阪玉造の屋敷で、石田三成方の人質になることを拒否して、かねての約束通り、家老小笠原少斎の手で潔く三十八歳の生涯を終えたのであつた。

ハちりぬべき時知りてこそ世の中の 花も花なれ人も人なれゝが、その辞世の歌であつた。

三成はこれより、敵方の大名の奥方を入質に取ることを思いとどまつたという。玉を熱愛していたといわれる忠興は、その悲報に接した時、声をあげて泣いたと『細川家記』に記されている²⁵⁾。

そして、一年後の一六〇一年、忠興は丹後より小倉に移り、玉の一周忌追悼ミサを盛大に行った。その際、日本人のイエズス会士イルマン・ピセンテは説教をおこない、玉に最高の賛辞を捧げたことが、フランシスコ・パシオの書簡に示されている。その説教を聞いた忠興はじめ、家中の武士千人余りは、涙を流して感動した。そして、忠興の新しい領地、九州の豊前においても、同じような年忌を行いたいとの申し出があつたとのことである²⁶⁾。

四 おわりに

今回の論考では、細川ガラシア夫人が、なぜキリシタンに回心したのか、その外的契機を中心に述べた。しかし、それは、単にガラシア夫人の生活環境の変転に触れたに過ぎず、その回心の内的要因にはほとんど言及していない。

しかし、ひとりの人間の回心の道を考えるとき、言葉では表現尽くせない深く複雑なメカニズムが存在し、究極的には超自然的な恩寵(ガラシア)であるというより他のないひとつの秘儀なのである。

細川ガラシア夫人の回心のドラマも同様であり、多くの作家たちはそれを中心に、それぞれのガラシア劇、あるいは、ガラシア小説を創作してきたが、そこには客観的事実よりも、むしろその作家自身の内面的肖像画(プロフィール)ともいえる姿が描き出されているように思う。

今回は、ヘルマン・ホイヴェルス神父の戯曲『細川ガラシア夫人』のテキストを中心に、ガラシアの回心のドラマを論述してみたいと思う。

注記

(1) 熊本のガラシア遺跡は、立田山にある泰勝寺庭園の四つの廟、すなわち、細川藤孝(幽斎)、光寿院(藤孝の妻)、忠興とガラシア玉の廟のこと。ガラシア廟の前には、その事績を記した高札と、ガラシア夫人愛用の手水鉢が置かれている。

(2) J・B・アドルフア作、ヨハン・ベルンハルト・シュタウト作曲「オペラ 気丈な貴婦人」(発表・上演 一六九八年・ウィーン)

(3) 昭和三十五年三月武庫川女子大学国文学科卒、論文名「田中澄

江論」、テキストは『田中澄江戯曲全集』第三巻。他に『現代日本キリスト教文学全集六「信仰と懐疑」』教文館昭和四十八年(一九七三年)五月二十日

(4) 一八九〇年八月三十日―一九七七年六月九日、ドイツ人イエズス会司祭、詩人、上智大学元学長

(5) 春秋社一九六六年三月二十日

(6) 土居健郎・森田明編、聖母の騎士社二〇〇三年四月二十日

(7) NHKテレビ「宗教の時間」一九六八年、聞き手 戸川敬一・土居健郎(『ホイヴェルス神父―信仰と思想』)

(8) 「同上」一八九ページ

(9) 一五五二―一六一五 日本の代表的なキリシタン大名。細川忠興とともに利休七哲の一人で親交があった。高槻城主、明石城主として信長に従うが、秀吉の禁教令に服さず、金沢の前田利家のもとに行く。一六一四年、マニラに追放され、翌年同地で病死する。日本のカトリック教会では、現在、右近の列福運動を行っている。

(10) 福音の土着化、文化受容

(11) 春秋社一九六六年(昭和四十一年)三月二十日

(12) 「天の橋立」(『人生の秋に』春秋社昭和四十八年)

(13) 『日本西教史』「細川ガラシヤと忠興」九十三ページ、加来耕三

(14) 一八七九年イタリヤに生まれ、一九二六年来日。一九六五年十月六日八十六歳で死亡。約四十年の宣教生活のかたわら、九五〇曲もの楽曲を作ったが、中でも「細川ガラシア」は注目される作品である。

(15) 「オペラ『細川ガラシア』画期的上演」十六ページ(『カトリック生活』ドン・ボスコ社二〇〇四年十月号)

(16) 『織田信長事典』十八ページ、西ヶ谷恭弘、東京堂出版二〇〇〇年九月二十日

- (17) 「細川ガラシヤの出自と系譜」 瀧喜義三十三ページ (『細川ガラシヤのすべて』 上総英郎編新人物往来社一九九四年六月十日)
- (18) 『柳営婦女伝』 (『細川ガラシヤの出自と系譜』 三十三ページ『同上』)
- (19) 『同上』
- (20) 要約。(『細川ガラシヤの出自と系譜』 三十五ページ)
- (21) 『同上』 三十六ページ
- (22) 「細川ガラシヤと忠興」 九十三ページ加来耕三 (『細川ガラシヤのすべて』)
- (23) 天正十五年 (一五八七年)
- (24) 「細川ガラシヤと忠興」 一〇二ページ
- (25) 「細川ガラシヤはなぜ入信したのか」 一二三ページ阿部光子 (『細川ガラシヤのすべて』)

参考文献

- 『細川ガラシア夫人』 ヘルマン・ホイヴェルス 春秋社 一九六九年三月二十日
 - 『細川ガラシアのすべて』 上総英郎編 新人物往来社 一九九四年六月十日
 - 『ホイヴェルス神父―信仰と思想』 土井健郎・森田明編 聖母の騎士社 二〇〇三年四月二十日
 - 『現代日本キリスト教文学全集六「信仰と懐疑」』 田中澄江他五人 教文館 昭和四十八年五月二十日
- (二〇一〇年三月三十一日受稿)